

Nara Women's University

【内容の要旨及び審査の結果の要旨】 高齢期におけるきょうだい関係の社会学的研究

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2010-01-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉原,千賀, 中道,實, 八木,秀夫, 中島,道男, 清水,新二, 澤井,勝 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/1201

氏名(本籍)	吉原千賀	(岡山県)			
学位の種類	博士(学術)				
学位記番号	博論第123号				
学位授与年月日	平成16年10月28日				
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当				
	人間文化研究科				
論文題目	高齢期におけるきょうだい関係の社会学的研究 —「関係性の歴史」からのアプローチ—				
論文審査委員	(委員長)	教授	中道 實	教授	八木 秀夫
		教授	中島 道男	教授	清水 新二
		教授	澤井 勝		

論文内容の要旨

本論文は、長寿高齢化社会における高齢者の社会化の様態を、きょうだい関係との関わりで追究するものである。高齢期の社会化とは、現在も含めた人生の再考、意味づけプロセスであり、そのプロセスを経て高齢者自身が自らの人生を評価した結果が主観的幸福感である。そのため、高齢期における社会化のエージェントとしてのきょうだいとの関係は、高齢期のみならず先行する時期からのプロセスとして捉えられる。そして、そこで行われる人生の再考、意味づけプロセスと、それに基づく主観的幸福感との関連を中心に、それらときょうだい関係以外のパーソナルな関係、社会活動との関連も追究する。

これらの課題を遂行するために、本論文は、2部(全7章)に分かれている。まず、序章「高齢期におけるきょうだい関係へのアプローチ」では、研究の目的、対象と方法および意義と、本論文の構成について述べている。

第I部「高齢期におけるきょうだい研究の視点と方法」

第1章「『静態的』研究から『動態的』研究へ」では、心理学を中心に展開されてきたきょうだい関係の先行研究を批判的に検討し、高齢期きょうだい関係を追究する本論文の課題を明確化する。双生児研究から端を発したきょうだい関係の先行研究は、分析の対象と方法に関して3つの限界を持つ。第1にきょうだい同士の関係に十分な焦点が当てられていないこと、第2に関係の存在するコンテキストが考慮されていないこと、第3に固定的な所与条件下での不変性が前提されていることである。

これら「静態的」研究の持つ限界を克服するために、「きょうだい同士の関係性とその変化」に焦点を当て、高齢期のみならず先行する時期からのプロセスとして捉える「動態的」研究の必要性が提起される。

第2章「ライフコースアプローチとネットワークアプローチの統合」では、先行研究を踏まえながら、高齢期とは人間関係の再編期であり、それゆえ、高齢期きょうだいは「それまで生きてきた人生の意味や連続性の提供、人生の残りの時間や過去の時代感覚の共有」という機能を果たすとの仮説をたてる。そして、高齢期に至るまでにきょうだいと結んできた「関係性の歴史」に注目した分析が必要であるとし、理論的枠組みとしてライフコースアプローチとネットワークアプローチを統合した「コンボイネットワークモデル」を構築する。これは、高齢期社会化のエージェントとしてのきょうだいを、Plath D.W. のいう「個人の人生を推進し規定するような他者＝コンボイ」として捉え、この概念が持つ「持続と累積」「ネットワーク」という2つの視点に着目するものである。「コンボイ」との間で「確認」「正当化」「予測」を繰り返し互いの人生の意味づけと連続性の付与を行う過程が、本論文が注目するきょうだいとの「関係性の歴史」に他ならない。

第Ⅱ部「高齢期におけるきょうだい関係の実証研究」

第3章「高齢期におけるきょうだい関係の実証研究の課題と対象者」では、前章で提示した「コンボイネットワークモデル」の経験的適用を試みて実施した質問紙調査と事例研究の2つの調査の実施概要を説明し、両調査データの基本的な記述分析を行っている。大阪府A市の老人会会員を対象に実施した質問紙調査によれば、高齢者のきょうだい数は平均5人である。『現在の』自分に最も大切なひとりのきょうだい」は、男女、年下と年上、年齢差の大小に関係なくほぼ同率である。これらの知見から、高齢期における社会化エージェントとしてのきょうだいは性別や出生順位、年齢差だけで決定されないことを明らかにし、それは「静態的」きょうだい研究が用いてきた視点と方法では捉えきれないきょうだい関係側面であることを確認する。事例研究については、きょうだいと甥から成るきょうだい1組（4名）、きょうだい同士から成る2組（5名）、義理のきょうだい同士から成る1組（2名）、当人のみ4名の、60歳代～80歳代の男女15名を対象に行われた面接調査の実施概要を説明し、そのデータを用いて、個人と各きょうだい達の間で結ばれている個々の二者関係＝「リンケージ」をひとまとまりのStarとして捉える課題が提示される。

第4章「高齢期におけるきょうだい関係とその規定要因」では、質問紙調査データをもとに、高齢期きょうだい関係の規定要因を明らかにする。わが国の先行研究では、きょうだい関係を「接触」の一側面からしか捉えていない。しかし、分析の結果、「間接接触」と「情緒的サポートニーズ」には、きょうだい関係に対する意識（「関係意識」）が作用している点で「直接接触」とは異なること、特に、「情緒的サポートニーズ」には「関係意識」が最も強い規定要因となっていることを明らかにする。これらの知見は、高齢期きょうだい関係の「間接接触」や「情緒的サポートニーズ」の側面が、高齢

期に至るまでの「関係性の歴史」に強く規定されることを浮き彫りにしている。

第5章「高齢者の主観的幸福感ときょうだい関係」では、高齢者の「主観的幸福感」ときょうだい関係との関連を分析する。その結果、「直接接触」は主観的幸福感を構成する3つの、どの次元に対しても有意な規定力を持たない一方で、「間接接触」では「老化の受け止め方」の次元に対して規定要因となっていた。前章で明らかになった両接触の違いとこの知見から、「老化の受け止め方」を左右するのは、きょうだいとの規範化された場面というよりも、個々人によって選択された場面での接触であることを示す。

第6章「高齢期におけるきょうだい関係の活性化とその規定要因」では、高齢期における関係活性化を左右する要因ときょうだいとの関係を通して高齢者たちが互いに満たしているニーズについて分析・考察する。事例研究データを用いて、各きょうだい同士の関係、すなわち複数の「リンケージ」の様相を分析した結果、①きょうだい関係の活性化に要因間の累積・加重的な相互作用が見られること、②当事者二者間にある要因だけでなくその相手と他のきょうだいとの間にある要因の認知や媒介的なきょうだいの存在もきょうだい関係の活性化に重要な意味を持つことが明らかになる。特に知見②は、きょうだい達の間をStarとして分析して初めて浮かび上がってきた実態であった。また、高齢期における選択的なきょうだい関係を活性化させる中核的要因として「幼い頃の関わり度合い」「ライフイベント／危機的状況での理解・サポート」の2要因が示唆された。このことは、両要因をもつきょうだいとの関係が人生の再考、意味づけプロセスで強調される持続性・累積性を持つために高齢期において活性化されることを意味するものである。

第7章「『関係性の歴史』からとらえた高齢期におけるきょうだい関係」では、Starを構成する「リンケージ」の一つの焦点を当て、高齢期における自らの人生の振り返り・再構成へのきょうだいの関わり、それが高齢期を生きる個人にとってもつ意味を、幼少期から高齢期に至る時間の流れのなかで追究している。その結果、①きょうだい間での影響関係は関わりがあまりなくなる時期であっても見られ、とくに、きょうだい皆にとっての危機的な出来事が発生した場合に顕著に顕われる。②きょうだいとの関わりを通して社会状況の追体験が行われており、その体験が後のライフコースに影響を及ぼしている。連続性の生み出されるプロセスに注目すれば、それは互いの人生における危機的・困難な状況をきょうだいで確認し説明しあいながら、それを認め合うというきょうだいとの「成熟のレトリック」活動の中から生み出されている。さらに、意味づけプロセスにおける連続性の付加が高齢期におけるパーソナルな諸関係・社会活動に及ぼす影響について、現在行っている社会活動にきょうだいとの間で確認された過去の出来事が結び付けられることによって、幼少期から高齢期に至るまでの連続性の実感が可能となっていること、が指摘される。

結章「老いと成熟をめぐる」では、本論文での諸知見を「関係性の歴史」という点から総括したうえで、それらの知見が高齢期の社会化に対して指示するものについて、先行研究の諸説を踏まえつ

つ、現代社会状況と関わらせながら包括的に議論している。「持続と累積」と「ネットワーク」に注目する「コンボイネットワークモデル」による分析の結果、高齢者たちは変更不可能な過去を「諦念」しつつそれも含め「自分なりに変わった」と自己受容する「成熟」の感覚をもつようになっていた。「成熟」には、人生上の出来事の時間的継起ではなくそれがもつ「意味」の連続性がキーになる。「意味の連続」にとっては、高齢者がきょうだい関係のなかで行う「新たな」意味の発見、媒介的なきょうだいの存在も重要となる。当事者二者間にある「関係性の歴史」だけでなくその相手と他のきょうだいとの間のそれが認知されることで、それらを結びつける「時間を越えたネットワーク効果」が作用したりもする。

以上の様態こそが、「コンボイネットワークモデル」によって初めて実証することができた高齢期社会化のエージェントとしてのきょうだいを持つ具体的機能なのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、長寿高齢化が進む現代、人間的成熟の全過程を経験する機会に恵まれた高齢者たちの「モデルなき高齢期における社会化」の具体的様相を、きょうだい関係との関わりで追究する。高齢期の社会化とは、自己の人生の再考、意味づけのプロセスであり、そのプロセスを経て高齢者が自己の人生を評価した結果が「主観的幸福感」である。

Erikson, E. H. は、人生の最後を「成熟期」とも言い、そこでの発達課題である「アイデンティティの統合」の特徴に、「人生の総括的把握」と「諦念することによる適応」を挙げる。高齢者が自らの人生を受容し、アイデンティティを再構成するためには、他者の視線の中に自らを置き、対象化する過程が不可欠となる。「他者」との関係の中で、初めて「おのれがなにものであったか」「なにものであるか」が認識できるからである。

本論文は、その「他者」との関係を「きょうだい関係」の中に見るという視点を提供する。わが国のきょうだい関係を扱った研究には成人期以前の関係性のみ焦点をあててきたものが多く、高齢期きょうだい関係についての研究はほとんどなされていないのが現状である。「高齢期における社会化のエージェントとしてのきょうだい」の重要性を浮かび上がらせた本論文は、幼少期の社会化をめぐるきょうだい関係に関する先行議論を、高齢期の社会化と結びつけ捉え直すことによって、新たな地平を拓くものである。

本論文は、序章と結章を除いて、2つの部から成る。第Ⅰ部「高齢期におけるきょうだい研究の視点と方法」（第1章～第2章）は理論編であり、第Ⅱ部「高齢期におけるきょうだい関係の実証研究」（第3章～第7章）は実証編である。

第1章では、きょうだい関係に関する従来の研究を整理し、それらを批判的に検討することによって、長寿高齢化が進行する現代におけるきょうだい研究の意義と可能性を追究している。著者は、これまでの心理学を中心としたわが国のきょうだい研究を「静態的」研究であったと指摘するとともに、その欠陥を克服するために Bronfenbrenner, U. の生態学的発達研究、McHale, M. & Crouter, C. の家族コンテクストを重視した研究、Allan, G. のネットワーク・アプローチ、Elder, G. & Hareven, T. のライフコース・アプローチの検討から環境要因や発達の要因を取り入れた「動態的」研究の分析枠組みを提示している。最近の理論的発達の成果を適切に組み込んだ分析枠組みは、単にきょうだい関係だけでなく、他の家族関係の研究にも適応されうる優れたものとして評価できる。

第2章では、「動態的」なきょうだい研究の理論的枠組みの構築を目的とする。著者は、先行研究を踏まえながら、人間関係の再編成期である高齢期においては、「人生の意味や連続性の提供、人生

の残りの時間や過去の時代感覚の共有」にとってきょうだいが必要な役割をはたす、という仮説をたて、「関係性の歴史」に注目した分析の必要性を力説する。そのために、ネットワークアプローチとライフコースアプローチに属する諸学説を批判的に検討し、新たに「コンボイネットワークモデル」を提示するための理論的作業が、本章の主要部分をなしている。この作業は、重要な諸学説に十分に目配りした周到なものであり、これまでほとんど研究蓄積のない、高齢期に焦点をあてたきょうだい研究に、確かな理論的基礎を与えるものとなっている。

第3章では、「コンボイネットワークモデル」を適用することを企図した質問紙調査と事例研究の実施概要を説明し、両調査データの基本的な記述分析を行っている。大阪府A市の12の老人会を対象に行なった質問紙調査からは、高齢者のきょうだい数、最も親しいきょうだいの性別、年齢差、地理的距離、きょうだい関係以外の人間関係状況、社会活動状況など貴重な知見を抽出している。また、事例研究については、「コンボイネットワークモデル」に基づき、被調査者を個人としてではなく、きょうだいや甥などをふくむ「きょうだいデータセット」として、関係性の変化、きょうだい関係の活性化を含む変化の契機や理由の分析課題を提起している。本論文の理論的枠組みの有効性を示し、きょうだい関係の「動態的」側面を明らかにするために、量的標準化的研究と質的個別的研究とを組み合わせた複合的な実証的研究方法が採用されている。

第4章では、高齢期きょうだい関係の規定要因を、「直接接触」「間接接触」「情緒的サポートニーズ」の3つの関係側面から追究している。質問紙調査データを分析した結果、1)「直接接触」は親族行事など規範化された接触を主とするのに対して「間接接触」は個々人の選択を基盤とする接触である、2) 高齢期におけるきょうだい関係の意識の変化によって「間接接触」が促進される、3)「情緒的サポートニーズ」には「関係意識」が強い規定要因となっている、ことを示す。これらの知見は、「間接接触」と「情緒的サポートニーズ」の側面が、高齢期に至るまでの「関係性の歴史」に規定されることを明らかにするものであり、きょうだい関係を1時点のみで、しかも「接触」でのみ捉えてきた先行研究が追究できなかった、本論文の理論的枠組みの有効性を証示している。

第5章では、きょうだい関係の3つの側面と、「主観的幸福感」との関連を明らかにする。質問紙調査データを用いて、先行研究が発見してきた「主観的幸福感」の「老化の受け止め方」「精神的な安定性」「孤独感と満足感」の3次元を確認した上で、1)「直接接触」は「主観的幸福感」のどの次元にも規定力がない一方で、「間接接触」は「老化の受け止め方」の次元の規定要因になっていることが明らかにされる。そして、第4章と本章の知見から、「老化の受け止め方」を左右するのは、きょうだいとの規範化された接触よりも、個々人によって選択された接触であることを証示する。先行研究の蓄積が乏しい新しいテーマを、オーソドックスな手堅い研究手法で追究した貴重な実証的研究として評価される。

第6章では、高齢期におけるきょうだい関係を、1) 若い頃から高齢期まで継続的に関係が維持さ

れてきたタイプ、2) それまで殆どきょうだい関係が持続されていなかったが高齢期に関係の再活性化がみられたタイプ、3) 若い頃にはそれほど活性化していなかった関係が高齢期になって活性化したタイプ、の三つを識別したうえで、活性化に関わる要因について探索的に検討を進めている。その結果、関連要因群の中でもとりわけ「若い頃の関わり」と「ライフイベント」要因が注目され、同時に特定の要因が活性化効果を持ち、他の要因はその効果を持たないといった単純な要因分類ではなく、同一要因がどのように作用した時に効果的であり、またどのような場合には効果的でなくなるという状況を析出することに成功している。さらに要因間の連鎖的、加重累積的な効果のありようにも着目しており、質的データ分析ならではの重層的な要因関連の分析となっている。

第7章では、第6章で扱われたスターと呼称されたきょうだい全員のネットワーク分析からさらに一步踏み込んで、リンケージと呼ばれる二者関係に焦点を絞り、この二者の合同インタビューを試みていることが方法的な特徴である。具体的には、きょうだいとの関わり、語りを通して社会状況や人生行路の追体験が行われており、その体験が後のライフコースに影響を及ぼしていること、またそれぞれのきょうだいのライフコースの交錯と相互確認、相互支持、そして今後の予測がインタビュー・データの詳細な分析によって明らかにされている。きょうだい間で展開された意味づけプロセスの特徴としては、相互の語りのやりとりのプロセスの中で、ライフコース上の個々の出来事とその前後の出来事と、脈絡としてもまた意味的にも結びつけられることで、連続性を持った一貫した人生物語として意味づけられていくことが、インタビュー・データに即して実証的に明らかにされている特徴は、内容的にも方法的にも特筆に価する。

長寿高齢化によってもたらされた「モデルなき高齢期における社会化」をテーマとする本論文は、これまで焦点のあてられなかった「高齢期社会化のエージェントとしてのきょうだい」の重要性を量的・質的両面からクリアに浮かびあがらせた。結章では、「関係性の歴史」に注目してきた本論文のもつ意義がより広い脈絡で押さえられている。たとえば、老いへの適応を捉えるにあたって、活動理論と離脱理論の間で行われた、あまり生産的とはいえなかった論争に対しても、「活動からの離脱か継続か」を超えた、より包括的な地平を切り拓くことを可能にした。本論文は「高齢期における社会化」というきわめてアクチュアルな問題に対して着実な実証的研究を残したというにとどまらず、この問題をよりリアルに捉えることを可能にさせた「コンボイネットワークモデル」の構築という理論的な研究も備えている点が高く評価される。まさに、理論と実証の統合であると言ってよい。

その成果は、高齢者が自らの人生を肯定的に捉え、あるいは過去の自分と折り合いをつけることによって主観的幸福感を持つこと、また生活の安定感と充足感を持つこと、そのような積極的な生活意識の発達を支援する福祉政策を形成しようとするとき、有効な実践的な方途も与えるものである。

以上の審査結果に基づき、本審査委員会は、本論文が奈良女子大学博士（学術）の学位を授与するに十分な内容を備えているものと判断する。